『國民新報』1939年4月16日

朝鮮靑年と愛國心

國民になくてならぬものはだが、ことににして、のないのは、であつて、まことに恥づべきだ。

のもましいは、の、のため、きよいをげることで、の軍人として、にることは、青年として、このもないであり、であり、である。特をして、たしめたのは、にの[だ]。

　しかしは、ずしものにいてばかりではない。本當にを持つて居るものなら、その人の日常生活の、いづれもの現はれでないものはないである。が、そのにおいてをるるには、そのはへ、にびるのであるが、のなしにはのももないのだ。のためとか、のためとかつて、をれして、があるくおもふのはひである。

　それならとはなんであるか。それはをがとふことであり、我が、我がと思ふことである。このはを我がとひまつり、へまつることである。のが、のにいてのをへるそのなのである。とととにれるびこそ、ののなのである。それはにのみられたびではない。ににきるものは、でも、そのやがであらうとも、そのの一は、ささやかなるをしげととのに、このをりますという云ふことでなくてはならぬ。

ところがのはいかられたをしてつた。がしつかりがとなつてない。をれてものもないとふのがだい。これではいけない。ここにのながある。二千三百萬のをば、のをするき、あるのにげるのは、にのなるなのだ。いやしくもともあるものは、しくしなければならぬではないか。きをて、日本をしつかりときしめよ。たとひにるでも、をつてにつでなくてはならない。

『國民新報』1939年4月23日

文壇慰問使の意義

　として金東仁、朴英熙、林學洙三氏が、る十五日へつた。のがにられたことはに一であり、一をするものでしてではない。

　のはだそのがくの人にされて居ない。それは歴史が若いのと、の朝鮮が文學、に對してとのいのによる。

　今日の朝鮮文學はそのにおいて、において、已にをしたのみならず、その殊にに對するにおいて、實にくべきものがある。他に多くの讀物を持た[せ]ない朝鮮においては、文學は一のな感化力をすることをしてはならない。

　るに、この朝鮮文學は、だつて、國民的によつていた例がなかつたのである。朝鮮の新文學は民族をとしとしてつたものでの作品は、文學的であると云ふよりは一種のイデオロギー的のものであつた。

　もつとにえば、にれることをけて居たのであつた。に、さへされ、一しきりにはマルキシズムのをびたでなければみないとふもあり、のとのと、いはゆるのとふなはあつたが、として、においてられたはなかつた。

　それがこののの皇軍をとして左右共のをしりじに乗り一となつたのである。においてもにおいても、このにをして、々のをり、のをへられたかにいてゐる。これこそはのによる、めてののとなのであつて、それのみにてもになものであるが、いて、やがてこのによりのとと、における、のがまれ、ここにしくしたが、――殊にのたるににくきをへるかはいふまでもない。

『國民新報』1939年4月30日

死しての後のほまれ[[1]](#footnote-1)　　―靖国神社招魂式

四月二十三日からので、これには今度の事變で國に殉じた一萬三百八十九柱のを、の神々としてめまゐらせるがとなつて居る

二十三日には招魂式があり、二十五日にはくも、にあらせられ、そのたる午後十時十五分をして一にをげたのである。

にられてるのには、のにした半島出身[者]もあるのだが、また、朝鮮總督府巡査、じくのがこのをふこととなつた。金子元氏の令弟は『靖國神社に祀られることそれだけで滿足です。私どものの心は内地の人に決してりませぬ』と述べたさうであるが、にもしいことである。

『で逢はう』

とはすると、それをるとののである。生きてはらぬをすことだが、にをたことをぶにもなるのである。ものためにすることによつて、も願ふものはない。ただにんでのとなることそれだけなのだ。のがつた『にられること、それだけでです』――これなのだ。

朝鮮人もこれから、どしどしにられなければならない。朝鮮のたるもの正にをその魂のとべきである。朝鮮にもたる京城ととにをてることになつた。これは實に朝鮮男児の[[2]](#footnote-2)たるべきである。

朝鮮人は元々いではなかつた。はやのをした。や安城市の大勝利がこれなのだ。にあり、新羅にあり、はれものためには、を見ることのごとくであつた。

かかるのは今日といへども朝鮮人のに流れてゐるのである。

今や朝鮮民族の進む道は一にして一あるのみだ。それはきては皇國のためにのとなり、死しては日本のためにの神となることである。にやをることなくしてを靖國神社やにあづかつてくことである。かくしてこそ、のを繼ぐことともなり、のをることともなるのである。

『國民新報』1939年5月7日

自己を大事にする

吾等の生活にはあまりにが多い。無駄を多いといふことは、とりも直さず物を大事にしないことである。をまないとか、にだとかいふことは、一種のに相違はないが、それと物を大事にすることとは別である。すべて、物を大事にすることは誠に君子人の徳である。物を大事にすることを知らぬ個人はするであらう、かかる個人の多い家庭もも貧乏するであらう。るに不幸にも朝鮮では近來物を大事にする精神がすたれたようだ。大事にすべきは物ばかりでない。の一言一動は、戰塲に於ける戰闘にも比すべきで、そのものでなくてはならぬ筈である。この一言一動が集まり積つてとなり事業となり、一生となることを理解したら、誰でも從來の自分の生活力のにたるを禁じないであらう。なき生活は物においてばかりでなく事においてもさるべきである。

し々が最もにしてゐるのは、ではなからうか。吾等は十分に人間をにしていゐるのであらうか。つたは、おのれを大事にすることを知つて居るつもりでゐるが、を大事にすることこそ、眞におのれを大事にするゆゑんなるを悟らない[。]吾等は電車や汽車の中などにおいてお互いに大事にし合はない、さもしいを見せつけられるのであるが、における、かの精神のが交通道徳の、の缺乏となつてはれるのである。

最後に、眞に自己を大事にするものは君國を大事にし、を、を、物を大事にするであらう。

『國民新報』1939年5月14日

二大痛棒

さき朝鮮軍當局の談としてが學科及術科にては良好なるをして居るがのをいて居る、との發表に就き、前號のに言及したことがある。今又朝鮮國民精神總動員聯盟川島大將の談として、新聞紙に次のやうなことがされた。『戰爭のは精神力、半島人にはそれが缺けてゐる、川島大將は語る』と云ふで『――戰爭の勝敗はといふがである。大戰前のドイツがさうだつた。ドイツは戰爭に勝つて國民がけたのである。戰爭には最後の五分間と云ふことがある。このと精神力が、のには缺けてゐるやうに思われるから、半島大衆にすべきは゛精神力゛である……』と。

この精神力と云ふことばの内容は、極めてなものであるが、前後のから見て、の精神や、の沈勇などを指して居ると思ふ。その『する』と云ふことばから見れば、愛國心をも含んで居るのかも知れない。そのいづれにしても川島總裁のこの評言は、前述の朝鮮軍當局のことばと共に、『朝鮮在住民衆』に對する二大痛棒であるにかわりはない。

これらの痛棒はそれで打たれる身になつてみれば、苦痛であるに相違ない。この評言を新聞で見た半島の人人は、恐らくをれて深く己をみたことだらうと思ふ。自分はこれ程のをき精神力に缺けて居るのだらうかとしたことだらう。

しかし半島在住の民衆たるもの、この痛棒にあって落膽してはならない。ましてつてはならない。これをありがたいおりとしてよろしく大奮發すべきである。突撃挺身の氣勢をひき精神力を發揮すべきである。かかる精神はかれらの中にも潜在してゐるだらう。外からの注文によつて得られると云ふよりはなるととによりて、めざめるものであり、されるものだと思ふ。

『國民新報』1939年5月21日

期待さるるお約束[[3]](#footnote-3)

の南總督の東上は朝鮮及び朝鮮人に關し大いなるをもつてゐたのだつた。支那事變このかた朝鮮人がしたをきあたりに上達し、首相以下關係要路と今後のの新方針に就いて重要なをするのが南總督の意中であつたことが、種々のによつて明らかになつた。

東電の報ずるところに依れば朝鮮をば從來の觀念を一し『き日本』として、朝鮮人をば、内地人とにでなく『純日本人』としてふと云ふことが、そののように思はれる。そしてこの精神のとして、三十年以内に朝鮮人に大陸との義務とを實施すると云ふのである。この文を草する時には南總督は東京を出發、歸任の途中であるが、此文が讀者に讀まれる頃には、或は總督は京城に歸られ、の如き或種の意思をされるかもしれない。そのでないと、今度中央當局と朝鮮總督とのに、取りめられた新しい朝鮮統治方針の内容をたしかめるすべもないが、もし新聞に報ぜられたことが事実であるとすれば、それはまことに重大なる一であり、朝鮮に關する限り一をする國家的と云ふべきであらう、もともとや、内鮮一體と云ふことばの中に、かかるがまれてゐたとは云へ、それが一の期限を付してされると云ふことは、新しい意味をずるものと云はざるを得ない。

南總督より新方針の眞相を聴くまでは、かれこれがましいことを云ふことはへよう。今や朝鮮及朝鮮人に對しては重大なる意思表示をなさんとしてゐる、と云ふ事だけを吾々はに置いて、つつましやかにを教育し、明日をしよう。

『國民新報』1939年5月28日

自治訓練

　去る二十一日朝鮮全道一に府邑面會議員の總選擧が行はれた。多少の選擧やもあつた様であるがそれはそれとして、投票をした人々がにに、自分の屬するのために、或候補者にき一票を投じたであらうか。これには反省の餘地があるのではないだらうか。

　今度の總選擧は地方自治制度改正後、第二回目の總選擧であつてこれから四年をしなければ次の總選擧はない譯だが、次の選擧は今度のよりも進んだ、もっと理想に近い選擧にするためには、る四年間をもに活用しなければならない。その活用とは民衆の政治であり、自治である。何もしないで、いざと云ふになつて選擧の公正棄權防止をんでも始まらない。

　先づ第一に民衆に自治の精神をませなくてはならない。面協議會、邑府會抑も何者ぞと云つた様な民衆のでは、選擧に熱のらうがない。之らの機關こそは、吾等の生活と密接不離な關係のあるもので、文化的にも吾等の幸不幸のつてる所であると云ふ自覺さへあれば民衆はら選擧を大事にするにつて居る。しかるに朝鮮の民衆にはまだこの精神がしてゐないのではないだらうか。それだから、候補に立つ者にも、或候補者を心に選んで投票するにも、本當の誠意がけてゐる。自治體の議員がに自分の生活の支配人であると云ふ實感があるとすれば、心から信頼しない候補者に、いい加減な投票をする様なことはないはずだ。

民衆に政治や訓練を施すことは國家の一であるが、殊に朝鮮の如く自治生活のにあり、且又遠からざる將來に於いては參政權の賦與も考慮されて居る所では、當局は民衆のに一層努力せねばならない。男女各學校や青年團などに於いて、自治の精神や習慣を養成することは、も有効でありましいことでもある様に思われるが、やに學務係、産業係と並んで、自治係と云つた様な一を置いて、自治指導の任に當らせるのも、の一策ではないかと思ふ。自治にな民衆でなければ、現代國民の資格はないのだ。

『國民新報』1939年6月4日

國民皆學と三皆[[4]](#footnote-4)

　は、二十五より、九ののをした。これはのとみるべきであつてになことである[。]いはゆるのおだ。

　々ののはにあるので、これなしにはも參もまらぬのはのこと、にたづさはることもないのである。かゝるなが、ので、のにされたことにのきをゆる、とふのはののにして、がにし、することのにきくなるかをすことになるからである。ひへれば、はにとかカネとかふなをにめるのみならず、ににいてもにくすることをするのであつて、それはもさず、をばとしてにし、てのをせしめようとするありきをすこととなるのである。

　としてにす道はへきれないであつて、わがそのものがちにすことでなければならぬ。ととはのもので、これをに、しきはにへるのはつたたることふまでもないが、し、、と三つにけてゐるのであるが、このけにはな一をみしてゐる。それはのだ。のが、、、はふにばず、、、、、、そのもとはるるにるまで、それはのなのであつて、そのによつてらるるのとびととはろへののとしてするものであり、がのたるにふることさへもへのをしてのみなされるものである。のかゝる（に、のみにあらず）こそのであつて、やがてはあらゆるのふべきちなのである。

さて、、、の三はれも―ちにをいてゐるのであつて、十にのをみるとふこと、三十にととをするとふことと、するものである。たるものしく一、三にふるのをて、れかはるべきである[。]

『國民新報』1939年6月11日

生活の美化（美術展覽会を機に）[[5]](#footnote-5)

　十八がにである。、、、の四よりなつてて、ににいたのをめたもので、それだけおにがえたである。このきはにへらるべきもので、、など[と]にのを□め、しくし、くし、くするののなのである。

　くき、しくき[、]かにきることがのであり、にのであるが、それだけではりない。そのにしくきることによつてのはうせられるのである。く、しく、かに、しくと、かうけてへるのはのからであつて、その一のなのでありもつとにへばこの四ツのは一のなのである。くと云ふのががしこさをするものでないのとじく、しくとはや、をするのではない。をりをきらびやかすのがではない。それはつてあるものゝづるところで、ななのである。いたでも、てがよくし、にきめられてをればそれが『しく』であり、つぎはぎのでも、よくつてきちんとしにつてをればそこからはずるものである。さなやはの一によつてせられ、しいもやきうりの、よそひによつてさをすものである。とはや、のこなし、ののをすもので、のそのものがすることである。

　く、しくきることがのかゝることでないのとじく、しくきることもしてのかゝるものではない。をすることによつて々はのびとしみとをすることがるとに、々のにはひやゆとりがじて一のをきなる、をすことが、これが、、をし、、、びやをするである。

　のはにのな一たるべきであり、にのくからはされたなのんだにいて一そのをずるものである。とはされたをする。

『國民新報』1939年6月18日

勤労の本意[[6]](#footnote-6)

　で、のがのなどしてるのをよくける[。]のみにはのが、一、のにいてをすることゝなつてるさうで、これはにぶべきことである。かかるのはもにらるべきではない。萬悉くにはらなければならない。そしてはに一のでらせてはならぬ。ののをのとしてをぶをるべきである。に『はせず』てふをば、のにいてこそすべきである。くもらにたせうて、のあらせられたとはる。はの一としてのをした。こそ――こそはのもい、一のめなることをこのしかとすべきである。

　しのなるものは、てにりいものである。『おれはかるしきにすべきではない』とふな（それはたであり、さもしきりであるが）がのにはれるなことがあつては、つてのをすることゝなる。ののきにとつたなさをたのはたのかにないことである。はなるであつてせびらかせではない。にのは、そのよりも、ろをびをしむとふがなるべきであるから、なはのさへもないものである。

　、にはにいてのとなり、のにならなければである。やでをしたものが、にればなつちやん、ちやんのにるでは、のをなさない。にのにきるなら、のにいてこそ、そのをすべきである。

　『のことはでせよ』とはにへられるであるが、のならのことをでしたゞけではりない。の、、などはのこと、のためのをいてはでることならでもなすべきである。

　はであり、はしたである。のは、よりものをからされてる。のはしくのにきなければならない。

『國民新報』1939年6月25日

巻頭語　金飾りを除れ[[7]](#footnote-7)

も、はや三、二のなるがれた。

みれば、まことになるであり、の々のまことにのみであるのはいふまでもない。がのもまたなものでないとのにしてきたことにもんじていとふ。

ところが、をあげてのびがかにまつてきたのは、どうしたか、にをね、のにもをせよとのへにするならば、てもゆうはない、がはこのな三にしかみのではなかろうか、それだとすれば、まことにしむべきことである。

のをするものが、、そのので、どこもまことに々として、を三もけているとおもへぬとしている、と々は々きかされるが、これはしてわがが、からほめられたとにつてはならない。

そのほめのにはかそけきわらいのんでゐることをのがしてはならぬ。

もしそれがとふなら百をのをくするがよい。くのが、をつているは、まだすべしとしても、そのにのぴかぴかつているのはどうしたことか。

さんやさんがをしてまで、にをじようとする、このに、があつてにれないならのにでもれて、つて、おくがよい、がのにことごとくをてゝこの三のとなとひつゞけているではないか。

ただおばかりのではのにもなるものではない。百のがなくてはこのをつていけない、だけでも三をけなければならぬ、よろしくももも、いやしくも黄金色のしたものはすべて、これをかられ。

まことにのあるのだなどゝ、どこかののおにし、いゝにるのではない。

三がる、の一をれ、これにすのはない。

『國民新報』1939年7月2日

眞劍の態勢

のので、にいてののがはれたが、がしたりにいては、するでも、せられてするでも、これをするのでも、どうもさがりないのではないかとはれたのはであつた。であるからとふのはさのりないにはならない。のをごつこにするなのさではのはいとはねばならない。

は、がにのがするようなことはないんだと、にするからのがんだせゐかもれないが、しのにみがじたらそのものがむことをしなくてはならない。

とはのでのないではなくてのとふであるが、をばとてふものでなければにつにはなれない。そしてのが、わがをつてるのだとふで一寸のをもせないのがのだそうであるが、このはずしもにつたことではない。にするはふもなり、、、をめとして々のはべてであらねばならない。スポーツやなどは一のやうであるが、のがなければそのとはしないものである。

のでをしのをしたものでなければ、いざとふに、としてにつことはないのである。

々のはりに不[眞]面目ではないか。でないか。やごとがぎるのではないだらうか。できふひの一や一にもさが、もつとうんとらなくてはならない。してやにして、ちとにして々はもつと、うんとにならなければならない。も、ももは、にけるものやうにばかりでさがたりなくてはにいりとさねばならない。

もづいたが、のやのもひつてにやるべきだとふ。

の！これこそは々のなのである。

『國民新報』1939年7月9日

-主張-　事變二周年　まだまだ不足の緊張感

　二の七七は、一のとと、そしてしいとによつてせられた[。]それはにきので、のどがによりされ[、]や二たるとのにつてのなのである。ひかねばならぬこのであり、たさねばならぬである。しそれは「一」によつてのみせられるのだ。のにつもたぬもて一につのであれとが々にびける[、]そのにの々はをたにしたのである。

にり々はのをもたざるをぬ。々はこののためにりにもであつたといふだ。々のがからにてなかつたのは、いまだのをないのとしてはむをないにしても、のだけでももつともつとをすべきであつた。これしきのやそのので、やのからされたりされたりしたことはにていとはざるをない。もつともつともしよう。もつともつともしよう。もつともつとしてをしもはう、もしよう。のもけよう[。]もつともつと『いくさのにはにつ』となつてやのおにもとうととがにった々である。

これはとしてのなるであり、のであるが、にがとがのにひをすとき々は一をげてののにさゞるをなくなる。がのものも、一にかゝつての一にあるからだ。しものにれなばとするに、々はをじないではないか。されば々はにどにもいさをるものであるが々のなるととは、ずやこのをつてりあるであらう。が々にする一のものは、にこの『るき』なのだ。はかながにてるにぎないが、のがをつてをるもくはないことであらう。はくば三のをしてもつとととのいたらしめんことを。

1937年7月16日　―主張―　李上等兵の戰死

　一は、の○○で々しくした。このは二千萬のにすべからざるをきらせた。のがぜられてにをせるもだに々はとしていかながらない。それはのであるためでもあらう。はいのにつてつた々のにつては、りにきいでありであつたせゐかもらぬ、『ありがたう、ありがたう』をりへすよりにがないのだ。

　にもでのもあり、のもあつてにられてるのであるが、のとしてのはをもつてとする。じくのでありながら、にいての四の一をめながら、のきにつてもののなかつた々のまなさがのなるによつて、かされたようながする。よりにはるは々のものなのだ。はそのによつてののいとほしきとなつたのであるが、に六百萬ののいとほしきとなつたのだ。

　々はの二つのをてなければならぬ。一つはわがをくてて、のとしてげまつるで、の一つはののためにすることである。この二つのをたすことにより、々はにたる[に]ぢないになるであらう。

　がにもにもであつたことをかされて、一しさとさとをずる、ふだんのくもしいであつたなればこそましく『にして』々しくふことがたのだと々はへられるのである。

　『、ありがたう！』とよをへてしようではないか。

『國民新報』1939年7月23日

　―主張―　英國よさがれ

　がアジアにそのをみ、のをひめてから二に□んとする[[8]](#footnote-8)。さしものもそのばかりでなくまでもすつかりられてつて、そのとして三のがからかつたのはととである。はののをとしてからととをきげたにらず、がつていざいをふになるとをてのなるをばさへけてつた。となであつたらう。

　一のはであつて、のなどてんでにない。のののためにてばそれでむのであつてのはとなれとなれである。このをばはさもなるかのくひ、またくのもまんまとのにされてた。にがのとののの□[[9]](#footnote-9)があるのだ。それはととのひである。

　さては々とのをけてのなるにきつた。がアヘン、、のとやらにをゑてにものにをつてるところへのにぬツと現はれたのがのであつた。にいてはににのてをしてたのである。それがのにいてとうとうそののをさらけしてつたのである。二のがののは二であることがらかにされたのだ。

がにしてたざりせば、は二のになつてふのだ。ばかりでなくがのになるにまつている。るにはのからめないのか、たるにらないのか。それはのちとのとをへず、二ははアジアにするりなるをもしるがあるとふことをしなかつたためのにはれる。

でがであるが、その一ののは、のにはありない。にしてだにアジアにけるのをせずばにはだ、『よがれ！』とにのはをはれるであらう。

『國民新報』1939年7月30日

[主張]　腦と腹の力[[10]](#footnote-10)　　―休暇休日の新しい價値―

　のをきしてとなつた。ととにみのないである、にみのあらうがない。やだつてのらくらのであるべきではない。それはのであるりにのであるべきである。そもそもはにするであり、はにをびまして、へのとへののひをたにするためにはるべきであるべきである。はだ。

　ののはりにもととにしてる。でのも、でのもとしてとにられてつた。をにするならば、ととはとのをすにまるにくてとだけがけてきいとなるであらう。とはとのことであつて、とはとのことである。とののてないとはでしかありず、ければになるものである。とのないインテリのを々はに[[11]](#footnote-11)せけられてるではないか。

　にしはりたる[[12]](#footnote-12)に、『ニヒヲヒテノヲニセントスルタルメテク[、]タルダシ[。]シテソノ[、]ニリテノニアリ』とあるのはをれとのにして『レヲビヲンジ』とひしは、ののこととしる。のとのとあつてこそ『ルヲハズ、フヲラズノヲシヲメヲリ、ノヲシテノヲク』することがるとのかとしる。

　一のためにとととをとして、それにありくとしてととをぶようではのになることはない。にのをしてとをってこそ、そののとがにを云ふのである。

　さて、このとのこそはのとなるものであり、これはとしてのをびふことによつてなさるゝものであるがにやをばにりてらるべきではなからうか。ににくなつたにいてこのの一なるをずることゝふ。

『國民新報』1939年8月6日

　―主張―　他人への禮儀

　はからのとばれた。は一らしいことであるが、のをすることしい。とふのははをてるとふが、にするのをらせるからである。はをらないんだ、それだからいにをめねばならないとふ[[13]](#footnote-13)のこそ、にはしいものである。

　にいてはを、、、、の五ツにして、をとんでるのであるが、でもこのでへないとふ。一とは一がのはにしてのや[、]のをふのであつて[、]あつてめてやのととがされるのであり、このととがされてめてやのととがられるのである。をくことをとふのであるがのまりにはととがふのであらう。これにを『くにをてし、これをしくするにをてすればあり、しかじか』とあるである。ととによつてやつとめされるでは一にはなりない。がによつてらめてこそ、とははれるのだとふのがのせられたなのである。

　の々は、、のにいてもしてしないとははれない[[14]](#footnote-14)。むしろのがいにれてるとるのがしいのではなからうか。これはにづべきことでありふべきことであるとわねばならぬ。してやち一にするにいては一すべきだとふ。ところがののいはらぬにしてはどのをじない。のはきてとつたなであらう。だてなことである。てのは、るもらぬも、がであるとふこそましいもので、これさえあればおのづとはられることであらう。とはののあらはれであるから。

『國民新報』1939年8月13日

旱害の教訓　―災害に打克つ氣魄の養成―

　はのにりのをへてゐるであるがにはににはれて、くにはんとするだけにだされる。しのはである。かかるにしてこそ々はにもかれないいをすべきである。それはなるにもつなのだ。々は十二のをしよう。あれのさへ、のをす一にぎなかつたかに見える、あのこそのにましいものである。のにましいものである。

　やをとつてはならない。それはに々[の]祖先及び々ののにすべきである。に々はこのによくへて一のをし、は々ののためにびかゝるにひしがれぬ、、びのためのるをすべきである

　、のためにはにしたことはない。の々がくなりしてのしきをたにはによりをつであらう。にそのととさへあれば、ほんののにぎないことである。

　ればにき、らざればをく。たるであらう、ふしだらであらう。してか一や二のでれてふではになきことゝはねばならぬ。づ、らんとするの一をけることに雄々しくならう。やのにるきなしになるまい、とふのをひさう。をにすとふ。はくばののをしてのく々にのをするたらしめんことを。

『國民新報』1939年8月20日

清掃運動　　―家毎に毎朝門前の掃除をしては如何―

とふはにしく、かしいをつ。らしきのがやをにに、のやをするはになことである。々のがりでにをいたりをしたりするしいもけられるになつた。はとはしくましいことであらう。

の一のはであるべきである。にも、にきてをきをひ、をり、おやおにをききめよとある。もそれはやにふことではなくて、てのにじたことである。これはだいことで、はしてしいではなくいことであり、にさせるべきではなく、らなすべきことであることをしてゐるからである。におやなどのはでなすべきでやのはがやるべきだとふ。くすることによつてのみやにのをすることがるからである。

をとしてのはかしいことながらだのをしてない。やはるにをひ、のはのにつてる。そして、そののさ、なでさへも、さながらののきをしてるのはんとのであらう。にり、んやにいてをやである。これはのやにもをすべきであるが、それよりもらのたることはふまでもない。

かうしてはうだらう、にのをするをこしては、のをしては。これはのからないことであり、にの、になつて、それこそ一二のではなからうか。

やをばにして一をもめないときに、ややはそのをつであらう。に々ののもされるであらう。

『國民新報』1939年8月27日

[主張]　交通の禮儀　　－たつた一歩だけ譲り合ふことだ―

　、をはず、ゆるはなのがのであるが、これはのがんになつたで、にすべきことである。かゝるはまでもいてしいことで、のがめばむ々はえる一であらう。

ところがでになるのがちにけるのである。のななでははりである。しいへしうのはまだしもとしてしけ、きし、みひりふ、をさへ々せけられるにいては、なるをしてのがなくならざるをない。もそれがなよりはの々によつてぜられてゐるのである。の々にはがあるが、のにはとがあるためのである。これではのたるのはれである。

　とかとかふものはをみよくせんがために、やのきによつてさせられたものであるが、そのはの『き』からしてゐるのであつて、にまれたものはさへすれば、らそのがにふくてゐるものである。がおにのにしほんの一りふことによつてのはによくなされるし、これにして、ほんの一しやばることによつてはおにえいのをするのである。に、『おに』の一こそは、とのなのだ。これに『ありがたう』と『みませぬ』の二ツをへれば、なる、なるにいてものはるのである。

　おにこのちにきることはにとかのためばかりではない。にのをなすもので、このをき、このにずれば、ちはなの一となり、の一にもなるのであつて、のこゝにありとふべきである。

　やのこそはにのくはしくかれたのであつて、にをへるなるものである。かゝるをへないはありないことだ。

『國民新報』1939年9月3日

[主張]　名譽の孤立　－たゞ皇道、勇往邁進あるのみ―

　を[[15]](#footnote-15)からはう、にのよりはうとふのに、といをんでゐたドイツがとをんだ。にくせられんにかれたドイツとしてはにはへられぬのさもあつたであらう。

　このドイツの一によつてされたの、びとしてるべき、獨伊露ととののにし、はなるとをてむべきであるか。一にしてへばのあるのみだ。一のはによつてのみしげられたとふのがのへるところである。のはのとと、してのによつてのみなさるべきだ。なまじつかの一とにしろのにあるよりも、てのよりしてにアジアをしたがツいでないだらうか。やには一のいもないのだ。のずるにひにをふをよりへられたのだ。れのであれにくはアジアよりはれるであるべき[で]ある。

　このにり々と々[の]にるものはとしてのだ。十二七七にまれかはつた々は、一まれかはらう。あらゆるのをて、のためにをはさう、をさう。百が萬一のをめよう。してがじしのにする三の一のころとなるをしよう。

『國民新報』1939年9月10日

[主張]　歐洲の動亂　－白人のいはゆる正義とは？―

　のより二十五、それがつてより二十、はび[の]とした。のをにしつゝぐる二十はの、のにやしたである。だ、のによつてになるかでるかれぬとはふものの、にでもなつたらはのそれよりもずつといものであらう。してそののはに[よ]にあるのだ。

　かゝるのるべきを、おに十二に悉しつゝも、をしなければならないにのがあるのだ。はとずるものをせねばならず、はのをへけなければまでのがてない。がればにはコルシカやチユニジアをしてイタリア＝イレデンタののにまるゝことゝとなり、ロシアは〝の″がさへしてればのがはれるのである。かくてはるのだ。の、の、これがのとなつてとなるのである。

　そもそもののをなしたのが、ヴエルサイユのの、なきであつて、そのがである。は（？）のをつて一りにをしたのだ。チエツコとかとかののいをきまで[に]りげてのたらしめたにのなるはかれてあつたのだ。チエツコとふのにをるべかりしはやのためににたざるをなくなつたのである。がのためとかや、千萬だ。のとのシノニムだ。

　なるのはされねばならぬ。それがであらうとであらうとにのたる[[16]](#footnote-16)たることにりはない。らくは、のははるゝることであらう。のりに、がにはれることは々とてもむでなくてはならぬ。

　モロトフの云ひ分を借用すれば、歐洲の紳士達が闘つて居る間に、吾々はアジアの仕事を奇麗に仕上げよう。數世紀間呪はれたる白人の桎梏に、苛まれたアジア諸民族に、自由の日を與へるのは今である。そして〝光は東方より″の古言が今日を豫言したことを、かの傲慢不遜なる歐洲人に知らしめよう。

『國民新報』1939年9月17日

[主張]　職場と功名心[[17]](#footnote-17)　―青年學生への警告―

　のはをにることだ。のにすることだ。もとはそのにでることちそののになることである。にける、にける、にける、にける、は、、、、あらゆるにけるになることが、ちをてることなのである。けけのとふものはあるものでもなければ、よしんばあつてもきするものではない。てとふものは、一ツのにうてをぎ、することによつてのみせられるものであつて、に決してなどあるものではない。

　よりよきをりくものになはないものだ。一ツのにのかぬものにくをむことはない。へられたるになこそもしいであつて、はずすることであらう。とのあるはなるをへられてもしくやつてのけて、してをはない。のにをふやうなものははそのにさへしないやくざだ。してそれのにおいておやである。からてにつまらなく、になりさうなをば、ととをてくこそしくましいの一である。

　ととはである。のなるであればあるもである。であるからのをめるのはである。はいにるべきだ。かとふにはの々のので、もなもので、のをへるのに、るにつでもあるからである。むべきはつたのみである。

　は二ツのつたへによつて、づをしいてはをする。一ツはいきなりいなるもの、きものをのみてさきもの、きものをむことであり、一ツは一、々、々々としてがにてがをきげようとはせずして、のをふことである。をばくとか、にるとか、とか、、などのあらゆるはこゝからずるのである。

『國民新報』1939年9月24日

[主張]　朝鮮青年と信念

　はでものであるが、、などのにいてにりである。これ、などのにいてをするである。が日本にいてものをてのびののためににをすことゝなつた。にける日本やなどでもくされるところがあつたことゝふ。

　は日本にさることをたないが、がやうやく日本にしたのからてものるをるであらう。そのるとふのはとりもさずしくにはつたとふことである。このにこそのとにがするのである。

　がしばらくにしてたとふことはではあるが、うべくもないであつて、つてのくはかゝるのにつたとられるがないでもない。が一には日本のなりとふにしたのは、ありにへばであり、もつとにへばが一をしてからであるとふべきである。であるからのにはをしかとしつゝも、それをではすのにだかのさ[、]きまりさをずるもないでもなく、一にはやのしがすつかりにかないもないではない。このためにくべきにいてながらも、一のさをせてるのではないかとふ。にいてり、ましてかゝるのにたりたる、にのやひるべきであるまいか。

　のはらくやのにするやや、そしてのにのをてしなくてはならないところのなさやきまりさをばかなぐりて『は日本なり』のいにきる一をく踏み出さなくてはならない。これこそはにとつて一にして一なるであるからである。のつべきにして一なるは、にしてひまつると、日本にするでなくてはならない。そのてはにし、よりしたるものでなくてはならない。

『國民新報』1939年10月1日

[主張]　新秩序の根本原理

　はによりてにがされつゝあるあるの一である。ののをとづけるのであるが、をばのはにするのだとしてる。らががをばとするのはらずしもからばかりとはへない。となればには八一のがされず、ののをてのをるからである。

　々のとか、とかはとかふものは、そのには々のがあるとはへ、そのをなすものはのであつて、そのはローマのからしたものとへるとう。ややキリストのはれもののをへて、のためにをしうすることをへたのであつた。かゝるのはとばれてるものであるが、このこそはのをなしてり、それが千ししてにりののためにとなつてれめたのである。

　こゝにいては々のののしとふにする。ちばのにらされたをして[[18]](#footnote-18)の々ののにることである。ちはにへはにへらはにへ、して々はつてにへるのにることだ。はにしてをし、はにしてをし、はにしてをし、々はににしてのをするとふことが、に々がつてつたところの、つてちにしなければならないところのなのである[。]のののがされなければ、にずるののも生れることはない。してやくのをしてのたらしめんとするのにいておやである。

　がするややは、てとより『かつた』であつて、ので『した』ではない。がやでさへもとからのかりである。のはのによつてもくされた[。]はののであらねばならぬ。々々ののであらねばならぬ[。]してのこそはをふべき八一の[な]のだ。々が四ののににいてつてると云ふは、のによつてのみされるであらう。

『國民新報』1939年10月8日

[主張]　戰死者と吾等　―戦没將兵の遺族たれ！―

　この、からのがして、そのに、しめやかななどのがられた。りがゝりのやあるはしばしをめて、のにとのをしてたのであるが、のとふがかでないので、りするもあつたのはにであり、にがをてゝるのをると、のさへもつた。なんとかしてれなくにをしるにしたいものである。

　にとつてはにするにれるがなかつた。はゞがめてなのである。しながらのとにくののしめるをる、はのするとがなるをて、にくののとしみとによつてはれたるかをみじみぜざるをない。のはのによつてられ、ののびはののしみによつてかはれてるのだ。これはでもでもない。そのりである。しからばはこれのびそのにしてうすればいだらう。そのをつてはとのをさう。そのにしてはあらんりのはりとけのをばさう。それはのことであるがしそれではりない。はのをしげねばならぬ。にりいてもをんでものをせねばならぬ。をしよう。あらゆるをし、をいしばつてししよう。をはう。のをらう。してはいつなんにもにつをしつゝ、のたるを、ありあるにてよう。かくてこそや、そののきにへることがる。

　々はかのをしたにぎない。としみとをてにしたことがりになぎる。かのでそれだけのひをしようではないか。それはすべてののになることだ。こののにしかすることのないのなさをば、のにしてるものをめけることによつてはうではないか。そしてのをば一にけたでかうではないか。にすべきにきてるのにおいてりである。

『國民新報』1939年10月15日

[主張]　銃後の奢侈を恥ぢよ

　のに、をげてのののに、でなのをつたのをる。をひやをせびらかすのをる。なんとしいであらう。にのがつてえたかにえるのはどうしたことだらう。

　たるはをつてはならないのだ。それはのとにてなくてはならない。はのこと、やもにしなくてはならないのだ。これもはにはになるからである。やを一にらなければならない。それがのであらうと、からられたきのしであらうと、く[も]であるつててはならない。それだけのをむことになるからだ。をさへにげるではないか。がなんだ。がなんだ。をにけてくとか、にしまつてくとはんたるだらう。

　てはりはせでにはせよう。るべくをはせよう。けたならばぎはせればむ。をべておをしやう[。]のをび、のをいればなんでもないではないか。

　一[[19]](#footnote-19)のはのによつてなさるべきだ。おととのをいて、はげられない。るにそののたるがのにけるとはんたるであらう。

　一にはのをするがある。こののをしてこそのにふさはしいになることだらう。

　一し、一し、一して一することこそ、のをなすものであつて、ににしかくびけたいものである。

　おにのをぢよう。

『國民新報』1939年10月22日

[主張]　個人の眞面目　―神と君の惠みのもとに―

をした一とへることつたへはない。つてこれをするはない。すべてのはこゝにざす。かゝるつたは、はの一であり、の一であり、の一であるとふりに、や、や、がののためにあるかのにはせる。をわがとひ、とふ。

は一であつてでもでもない。はやの一であることをして、の一である。つてはへるであつて、へられるではない。にあてがはれたは、とをてへることが、てののである。

をれてなく、をれてはない。るに々がするであるかのくへたり、つたりするのは、ののが、よりれるかをするのさに、まだしてないことをしか、てるものでない。ひかへればなるであり、かさにならない。

一ツ。なくしてありわがくるはがにして、のにあらずとふること、かでれいことはない。にをけふたのもであり、に々のをへふのもにまします。、、、てがするものはよりのけとすることこそ、の一でなければならない。

をしまつらぬものが、にしてのにましますことをしまつらうぞ。

と、をみ、ひ、めさせふ。そのにひ、そのにひらんこそ、わが一のとずることは、そのたるをはず、べてののたるべきであり、ちのであり、ににしてらざるのである。

さればとてをすることではない。ののをなす千はに一一のによつてなつたものだ。わがのも、一ののに、々一一ののによつてされるのだ。このにこそ、の、、びがあるのである[[20]](#footnote-20)。

『國民新報』1939年10月29日

お米の節約[[21]](#footnote-21)

　これから來年の収穫期まで國民は切り詰めて切り詰めてお米を節約しなければならない。今年の旱魃は單に朝鮮地方に未曾有のお米の凶作を來たした計りでなく、實に日本全國を通じて相當多量のお米の不足を生ぜしむるに至つた。この不足をば吾々は七分搗米と、雜穀の使用によつて補はうと云ふのである。今や精動聯盟は各愛國班を通じて節米運動に大童であるが、實際に節米の實行者となるのは家庭である。

　お國の呼掛けに應へてお米を節約しよう。先づ白米を止めて七分搗米を使用しよう。そして粟・麥・玉蜀黍・小豆・薩摩薯・馬鈴薯等を混食しよう。而して各家庭でお米の消費を半減、三分一減、少なくも四分一減となるやう努力しよう。そして我が國民の一心一體の例をこゝでも見事に示さう。

　貧乏だからお米を節約しようと云ふのではない。一家の生計のためにするのでもない。國家全體のためにお米を節約しようと云ふのだ。倉庫に幾百萬石のお米を貯へて居る大金持でも、七分搗米に雜穀を混ぜて食べようと云ふのだ。かくしてお米不足の難局を切り拔けると同時に億兆一心の國民的訓練の、今一ツの課程を立派に果た[さ]うと云ふのだ。

　已に朝鮮には五百萬石增米計劃が立つた。來年よりは灌漑施設と共に田作面積がどしどし殖やさるゝことであらう。永遠に食ふに困らぬ國と云ふ目標に向つて、邁進する譯であるが、これを機會に朝鮮の農業が一大飛躍をなさねばならぬのは實に山の利用である。所謂林野と云ふものであるが、大いに之を開墾して雜穀を作る畑や、牛や馬や羊や豚を飼ふ牧場にすることである。山國朝鮮のなんと廣大な地域が利用されずに放置されて居ることだらう。當局では今年白頭山一帶利用價値調査をしたのであるが、朝鮮は何處へ行つても山はあり、山あれば可耕地の麓はあるものだ。粟・薯類・麥類・玉蜀黍は何處に播いたつて出來ると云ふ土壌の朝鮮ではないか。猫額大の平原にこびり附いて、お米計りを食はねばならぬと云ふ法はないのである。調理法さえ宜しきを得れば、畑で出來る穀物だけでも、どんな美味しい御料理でも出來ぬことはない。現に歐米人はお米なしで立派に食卓の贅澤が出來るではないか。畑作と牧畜と漁業と之を合はせれば好い譯である。

　お國でお米を節約せよと云ふから節約しよう。お國で雜穀を食べよと云ふから食べよう。精動聯盟の云ふことは、お國の云ふことであり、町洞會や愛國班で云ふことはお國の命令であるのだ。お國の呼び掛けに應へ、お國の命令に従ふことはなんと嬉しいことであらう。

『國民新報』1939年11月5日

[主張]　愛國日自肅　－その日だけでは何にもならぬ！―

　がめられてから、二のが、さる一にはれた。といふをつでは、のがにをかけた、ののそのはしいをあげたといふことであつた。

　さてというふものは、そのだけで、そののはれてもよい、といふものではない。められたそのよりも、ろがなのではあるまいか。のにしたから、そのはいにしまつてもいゝ。[[22]](#footnote-22)といふやうなきひがあつてはである。のへに〝これ″といふことがある。これはなのといふは、一のあつたとか、されたとかにるのではなく々のがけがち『』のでなくてはならないのだ。

　[の]このも一だけにし、そのはさまでしない、といふやうな心がけでは、そのにしたのが、のにもたぬことになる。

　しといふものは、にのきにさるゝもので、でせたやうに、のひもなくりつてれないのもである。

　そこで一に一や二のでは、ともすればれがち、みがち[にも]なるので、一をとめられたのであるから、る十二のそのは、一ののをする。

　さる一ののがことにをしたやうであるが、これはが、したことはであるが、そのとなるが、一にのにしたからである。しそのにぎがつゞけられてゐるとしたら、これはのはなければならぬとなるだらうか。

『國民新報』1939年11月12日

[主張]　半島人と國民精神

七からがであつた。々ははに參してをり、はのをにし、、のをし、としてのとをひこしたのであつた。

とはなんであるか。それは一にはのなりとふいととである。二には一とふかなるである。三に々はをめをひ、々そのをにつて、てのに、をにげることである。は々がのに一せんがためにけられたのであつた。

のにり、としてにをすべきことがあつたである。ひへれば、なるがに、にししなければならないことがあるである。それはなんであるか。

『はのなり、はがにまします。がもものなるも、がのも、すべてがのなればてに報いん、がにしかくあるべし』とふがそれである。し繰返しくし、にしてひ、をてふによつてににはのにしてくのである。この一にいてはそれのをめたである。

一のもののと、かゝるによつてのみせられるだらう。はに一をされた。しされることにつて一がるのではない。がもしくきになることにつて一はるのだ。かるがに一ののはのにられてるのだ。に一はされてる。はとにのである。しそれはがしいとふことにはならない[[23]](#footnote-23)。がにいてのとなるには、のがであることを、くしなければならない。それはのだ。へし繰返へしのさと、これにしるのをじじにしてひ、をしてずるによつてのみ、の一はめられめられてくのだ。ねてふ。〝一はのによつてのみせられるものである″と。

しのの一をにごしたものがあるとしたら、にの一をしやう。それよりもはここをしやうではないか。

『國民新報』1939年11月19日

[主張]　存廢の選擇　―氏制度實施三つの―

　にするにより、はされることゝなつた。は十五一一より六ヶに、しくとすべきをにけでなければならぬ。しこのにけでなきものは、のをてとめられることゝなつてる。

　さて、ののは三つにけられるである。のたる、のがその一で、のがその二、してこれをに、のをして、ののでもつものゝ一つをいてしいとふのが、その三である。ののはではなく、に、とふことになつてるが、のにしても、るべくがのにへることをんでるがかにはれる。

　も遠く三はのこと、のにるまで、ゐてゐるな、のはされてず、やにしたものやにしたのによつて、されてたにぎない。の[は]がでがだとつたり、の朴赫居世のがだとふきは、るにらぬであつて、ののもがではなく、『をて』とふのであり、のな、も、、ち『をて』とふのをそのまゝとしたのを、のをしたものにぎない。ののがののをへたものであつて、とか、とか、、のやのを、のにしてとしたのもやののとして、はつてるである。

であるから、が七百してたのは、のてゝふのがろであつて、しがるはないである。

やのは一にあるがに、このにはりとなるものは、一もくてゝからなければならない。してののはそのたるものでなくてはならない。

しのをめねばならないことは、なので、のをらぬことである。なものゝにも、はのにすべきものもあるであらう。しつて、かゝるをしたとすれば、それはのとなるはである。にはももないものでも、にはのあるものもあるかもれぬ。こんなものもひてくすはない。はきものと、なきはし、しきもの、一にりとなるものゝみをくにある。そのにいても、いにしきものはをするがらざるものは、につべきであらう。

『國民新報』1939年11月26日

[主張]朝鮮文學の新傾向

　のが『日本にいたの』をスローガンとして、をしたのはになこと、にるべきことである。つてはしいをつたが々まれることであらうが、らばそのしいは、どんなにつてはならないか、どんなにはねばならないか、とふことがのになるである。

　づ、つてはならないのは、である。には一イデオロギーがつて、もは、のをえて、にされたかのに、てるもなくはなかつた。つてかゝるの、には、このイデオロギーのであつて、それはににつた、をしたりでなく、にのかられたであつた。かゝるや、それにしたののは、わがのにるりでなく、にのにはぬものである。であるから、のは、にかゝるイデオロギーからしなければならない。

　二にがしなければならないは、にしては、の、をばもそのものゝくせ、のするき、にしては、、、ではなく、をるがきなをることである。のにいて、かゝるをることは、にのであつて、そのにすべきであらう。なんとなれば、をゐてのは一、くてをすことにぎないが、のをりたはとをして、十百萬のをすことになるからである。

　三につてならないは、一をするきのである。一はにわがのである。であらうと、なるものであらうと、にするものはされるがない。

　、せねばならぬのにつてののがまつたである。のをしたものでなければならぬ。つてはのをしてり、一、のも、よりいへののであることをしたものでなくてはならぬ。してのきしきをし、されたるをふものでなくてはならぬ。

　かゝるこそ、がつである。

『國民新報』1939年12月3日

[主張]　寒波と吾等　―戦地を偲び慰問品を送らう―[[24]](#footnote-24)

　のはになくかいとつてた、かにのを見た。かゝるのがのにぼすのなるはふをたぬが、にぜられるのはやにられると、のである。にけるはのにまされてるとのことである。

　にる、ましてのでもないものが、、のに、がましいをらすのは、にて、のりとはねばならぬ。がするなるがになきことであるかをしみじみじなければならない。

　さてはこのをふるにり、をなしてならないか。はをなさねばならないか。

　けてはならない。かのめになることのために、一もさずしてかねばならない。とは、々がしてくことにならぬ。そして、は、のをしてはならない。をせぬにいて、であれ、であれ、であれ、てのをしなければならない。かくすることによつて、にはとなり、には、ともなるのである。これこそはのであり、によるである。

　しながらはこのをへ、をするにり、にせねばならぬことがある。それは、やにさをぐための、かのをすことだ。一のをにらう。五百萬で、一一のをにるとしたら五百萬にるであらう。のにしてもで一當り十をすとしても、五十萬はちにまることであらう。んや、百千から、十萬、百萬をしたとて、どをじないのもくないのにいておやである。

　い！ へのをらう。

い！ へのをらう。

は、[在]はがとなつてやつてるのであるが、とをへた、をとした、をしてしい。

『國民新報』1939年12月10日

[主張]　總動員の限度[[25]](#footnote-25)

　やとふは、んにはれてて、でも、でもんどかないことはないとふであるが、のとして、一つのをるきれると、にたこがて、めていたのがしてるものである。やのもにそのにしたのではないかとふ。りとすれば、それこそはゝしきである。

　はこれからである、だからもこれからである。とばれてたからがまつたのであるが、がにぶにんで、のがし、にそれが、にするや、のは、のするにつた。しながら性の、はして、これでつたではない。がんでるところのとふが、はとつたなてはにをなかつた、なをんだによつてきかへられるのくないとふことをすることは、してのないことではない。

　のとふのには、にとふがされたであるが、のびそれにつてるところの、へばソのはきてのないことであり、にのみをてても、がをびるはもあるのである。かくじれば性のはだだとはねばならない。

　にしたものがである性のにして、のさや、さやさがさるべきはのである。されば、ふところのは、だだのではなくて、ろの準備であるとへる。これをにいてても、さうである。やつと持場のや國がされただけで、とでもはうか、だのにさへってないである。にがい[て]たのが、つひこのころで、をしてやつとこれをじたであるから、のがするのは、々これからとねばならぬ。これにじて、ののまでも、で、の、それこそなにるのは、のことであらう。

　だ國のがりぬとか、にするながりないとか、ふをくのは、にこののであらうとう。

　この、だまでするか、そのさへもしのかない、このをりけることこそ、國ののであり、に、國のであることを、國がにするにつて、はめてされるのであるとふことをこのびするがある。

『國民新報』1939年12月17日

[主張]　興亞の基本思想[[26]](#footnote-26)

　る十一十八二に、がされたのにするが、十一一されて、にされ、にさるゝことゝなつた。

　のとして、（一）の、（二）の、（三）アジアの、（四）のがげられてり、としてはのをするとともに、らのをし、ののとしてのをじて、族ののたらしむることをて、のとせねばならぬ[、]とひ、にしては、にとしてのをせしむることは、の一として、をせしむるにくべからざるとある。

　ににしては、による、なるにおいて、のむるところは、やではなく、にのにあるが、これがゆゑんは、一族のとのは、族のにするにしないからである。し『ウシハク』[[27]](#footnote-27)にあらずして『シラス』[[28]](#footnote-28)ことをてとすることは、わがのであり、にのでもあるからであるとひ、に一をめて、〝族のにおいて、族をするはきなるをて、わがのは、族ののたるべきによるべきである″となつてる。

　がのたる、のをなすものであるが、にのちののでゞもある。

　かゝるのは、ににのないことであつて、かののにしてるには、そのがらないかもれない。これをしも一のによつて、いはゆるのくするかもれない。しかしながらののによつて、これのが、んでのりで一のもなき、そのものであることをすがくないであらう。ののんたるかをにしらすことがちをふことでなくてはならない。

　たるもの、づのをして、一一このにき、こののでなくてはならない。そしてづ、アジアの族に、このいをば、せしむるは、は々のであることをせねばならぬ。

『國民新報』1939年12月24日

[主張]　改姓改名に就て[[29]](#footnote-29)

　々からのをることになつた。のはでなすことであるが、だけはのにかされてる。であるから、なるものからのがなければののがにとまることゝなつてる。つまりをはぬものは、のそのでいわけである。

　しながら、々はがをしたを、としなければならない。しものをめないものとすれば、をすとふなをさうがないではないか。とはひながら、のをめればこそ、にするをしたのである。らばそのとはなんであるか。

　一にしてへば、一のからであつて、な、ちなべてのものを一しやうとするもので、これはからもさうであるが、のからて、ありがたいことであり、ましいことである。してこのなものゝで、もにち、もへるのにもをじないものがである。こののが、一をして、一のをぐことがしい。かゝるからるをけるものは、なることをたない。いつそのこといつて、をばにめやうではないか、とふのがこののでなければならぬ。でなく、にとふのは、々のをする、のありがたさであつて、してをせぬでもいとふではないである。

　はふだらう。にがのをればとて、ちにになれるものではないと。をにくこともされず、もも、はもされるものではないと。それはにそのりである。しのなるの一であることだけは、とへどもめないであらう。それでいではないか。一だけで十があるではないか。

　それのみではない。でが十五六までゝあるが、そのがれてにめて、のれたことをするになるはかである。てののをはりはにするものさへあつて、あたら々のをにされてからのりにぎしたこともあつた。のにいても、そのをさないにすべきである。のありがたきをば、なく、にけれやうではないか。

　にのがぽつぽつはれるになつたことは、にであるが、にやにこだわつてるである。がとめたりがとめるなもので、をれまいとするとしては一けぬでもないが、ろとしてののをして、つてなにしてしいものである。ののく、、のく、をまでするのにのいものはも、さうでないものは、、のくろそのにんだのにすべきであり、も一、、三、、、、のにひつてにすべきである。なものにするはないではないか。

『國民新報』1939年12月24日

[冬季雜筆]　歳暮雜感

李光洙

　はとかとかふ、のうつりかはりは人にずるつもりですが、歳のとかとかふなことにはどをつてひました。からさうなつたのかと、おきになっても、一寸おにしますが、もう前からのであります。

　子の時にお正月がちしかつたのはふまでもありませぬ。何お正月がしかつたのか、それはにな所でありませうが、等は無にお正月をしがる方でありました。ところが今ではど、そんなものにがないのです。

　年前に一度、でのをきながら一でを詠んだりしたことがありました。見にられた、のが綻びて、かな薫をしてりました。これがに取つて、のの思出であります。

　三四がしたり、がつたり、に融けがしたりしてります。にはが上り、にはがきらめきます。だからとつて何んのもありませぬ。

　家内がで、くをしてりますが、大晦日だと云ふんでがけろりと直るともへませぬ。風邪でを出した、子のがまりました。等は、今いくつたらお正月だ、お正月になれば、八つになるんだ、六つになるんだ、おにいちやんが十二になるんだと、日に何ともなくにをかせます。しがと來てるから、等にはおやしいおべゝもうかとはれます。

　年――もつとも市だけですが――のともふべき附大賣出とふ物が、今はないさうです。時のだと受け取れますが、それにしても毎日の上高は、に年のそれをしてると新がつてるのは、つていことやら、いていことやら。まだまだですねとふべきだらうとひます。

　先日がてつたことがありました。のを二もしたが一もられぬので、むなく粘米を買つて來て、凡二日間おでらしたまではかつたが、やつとのがりかけた子のが上がつたのでいたしました。おを食べると子はを出すとふことをたる家内からかされてはふはふの態で町中をつて、やつといくらかのお米にありつきました。これもでしょうか。

　人からられたが、もう四寸も五寸も々とびてます。をけるのももないことぢやないでせうか。一なんて、のなものにふさはしいではありませぬ。一をなんとつて、あんな上な、なをつてくれたのか、その人のがれませぬ。には々やですね。年も入中に、チウリツプだの、ヒヤシンスだの、だの、グラヂオラスだの、にもないを受けました、いづれも私にはのいものでありました。たゞ北山の、だも融けぬから取つて來たとふだけはかしいと思ひましたので、をんだこともありました。はには、かゝはりのないものでせうね。

　今年は約で、のがくなるとふので、四年の男の子が、ふ分スケートが出來るんだと力んでをります。あれもどうしたことか、お正月そのものには大してを持たぬです。要するに朝の家では、金をしてには、のやをじなくなつたのではないでせうか。お分が、分く、朝の家からはしたにはれます。

　では大とふ事がありますね。年二六月と大とに、前にいて去間の身やのけがれを祓ってくことであるが、さうすれば、元には『あな手押し』『あなさやけし』[[30]](#footnote-30)のきで、新播き直しの生を始めるとふことになつてとか新年とかふが、それこそはつきりとを持つて參りませう。しくじりがちの身、けがれしのが身、何時までもくよくよとのさだけではまらぬ。日祓つていたのだ、今日からはさやけきの身なのだ、と出直すことは、人間としてに要なことだとひます。かうふなからすれば、はにのいもので、この一年中のが身のを、であらうと、であらうと、すつかりしして、一一をも新年には持ちさないと云ふはにましくしいもののにはれます。りたものもす、かつたものもあやまりおをする、そして人間のしさに、分ではなしにした々のけがれ、々の事までもに祓つていて、上りのなさつぱりした持になつて、のに耳をましつゝ、々のおにしたがつて、はに、はに、じつとりむ、これはにな、しいことだとひます。

　これで子のぜられたのがげますか。御下さい。

1. 単行本『同胞に寄す』では「の」を取って「死して後のほまれ」とされている。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 単行本『同胞に寄す』では「誇」が「廟」に代わっている。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 『同胞に寄す』では「お約束」が「約束」になっている。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 単行本『同胞に寄す』に収録されていない。 [↑](#footnote-ref-4)
5. この文章は、単行本『同胞に寄す』に収録されていない。 [↑](#footnote-ref-5)
6. 単行本『同胞に寄す』に収録されていない。 [↑](#footnote-ref-6)
7. この文章は『國民新報』巻頭語欄に掲載された。単行本『同胞に寄す』には収録されていない。 [↑](#footnote-ref-7)
8. 単行本では「垂んとする」になっている。 [↑](#footnote-ref-8)
9. 単行本では「對蹠性」になっている [↑](#footnote-ref-9)
10. 単行本ではタイトルが「胸と腹の力」となり、本文でも「腦」が「胸」に代わっている。 [↑](#footnote-ref-10)
11. 単行本では「所在」が「所々」に代わっている。意味的にはこちらが正しい。 [↑](#footnote-ref-11)
12. 1939年5月22日勅語。1941年7月に文部省から刊行された『臣民の道』に収録る。 [↑](#footnote-ref-12)
13. 『同胞に寄す』では「謙抑」が「謙虚」に代わっている。 [↑](#footnote-ref-13)
14. 「間然しないとは云はれない」は『同胞に寄す』では「間然たるものがないとは云はれない」に代わっている。 [↑](#footnote-ref-14)
15. 単行本『同胞に寄す』では「不幸」に修正されている。 [↑](#footnote-ref-15)
16. 「徴便」は単行本で「徴候」に代わっている。 [↑](#footnote-ref-16)
17. 新聞では「職場と巧妙心」と誤植されていたが、単行本『同胞に寄す』で修正されている。本文ではすべて「功名心」になっている。 [↑](#footnote-ref-17)
18. 単行本『同胞に寄す』では「道義主義」に修正されている。 [↑](#footnote-ref-18)
19. 新聞では「般一民衆」と誤植されていたが、単行本『同胞に寄す』で修正されている。 [↑](#footnote-ref-19)
20. 『同胞に寄す』では「眞面目、眞價値、眞の喜び」に修正されている。 [↑](#footnote-ref-20)
21. この文章は『國民新報』の影印本にないので、単行本『同胞に寄す』130-131頁に収められているものを載せた。単行本にはルビがふられてない。 [↑](#footnote-ref-21)
22. 「しまつてもいゝ。」は『同胞に寄す』では「緩めてしまつてもいゝ、」に変わっている。 [↑](#footnote-ref-22)
23. この文章は『同胞に寄す』では「併しそれは唯だ格が等しいと云ふことだけでは何もならない」に修正されている。 [↑](#footnote-ref-23)
24. この文章は単行本『同胞に告ぐ』には収録されていない。 [↑](#footnote-ref-24)
25. この文章は単行本『同胞に告ぐ』には収録されていない。 [↑](#footnote-ref-25)
26. この文章は単行本『同胞に告ぐ』には収録されていない。 [↑](#footnote-ref-26)
27. 「ウシハク（領く）」は「自分のものとして領有する」の意。 [↑](#footnote-ref-27)
28. 「シラス（知らす）」は「お治めになる」の意。 [↑](#footnote-ref-28)
29. この文章は単行本『同胞に寄す』には収録されていない。 [↑](#footnote-ref-29)
30. 「あな、たのし（ああ楽しい）」、「あな、さやけし（ああ清らかだ）」は、日本神話で天照大神が天岩戸から出て世界に光がもどったときに神々の発した言葉。 [↑](#footnote-ref-30)